

# 推移する新宿「コリア・タウン」における 「場所形成」の諸相

広田康生

## Place-making Processes in Transitional “Shinjuku Korea Town”

HIROTA, Yasuo

**要旨:** 本稿は、新宿大久保、百人町における新来住者、エスニシティと旧住民との「場所形成」をめぐる衝突と融合の諸相の社会学的実態報告を目指している。エスニック・コミュニティへの統合圧力あるいは「排外主義」が強まる中、「積極的主体」から「ネガティブな主体」へとイメージの逆転が進行しだしたといわれる移民、エスニシティと対応する旧住民との「場所認識」の衝突と融合過程と、「推移空間化」を背景に、移民、エスニシティ側からの連携を模索する姿を描こうとしている。

以下、1では本稿における問題意識について主に「共生」の逆転現象について問題提起をし、2で、現在のエスニック・コミュニティを分析する分析地平について、トランスナショナル・コミュニティ視点と、推移空間化、及び昨今のヘイトスピーチに代表される統合圧力の現状について説明し、3では、こうした「場所形成」同士の衝突と融合を、背景としての新宿の「推移空間化」の現状の中で説明し、4において筆者の聞き取り調査のなかに、場所認識の実相を見ていく。本稿は、「排外主義」の中でも「共生」の契機を探ろうとする移民、エスニシティと日本人住民の活動を描くことを目的にしている。

### 1. 問題の所在と分析枠組み

#### 1.1 問題の所在一場所形成と90年代先行研究の文脈との連続と断絶

本稿で対象とする新宿大久保・百人町界隈に形成されている、「コリア・タウン」の研究としては、奥田道大、田嶋淳子編著の研究が有名である（奥田・田嶋 1993）。奥田・田嶋の研究は、言うまでもなく、池袋から新宿へとフィールドを移しながら展開した一連の「外国人居住者を受け入れる「都市コミュニティ」の研究であり、「共生」の位相をめぐる研究であった<sup>1)</sup>。奥田は、2004年に出版した著書『都市コミュニティの磁場』のなかで、当時の池袋、新宿調査のポイントを振り返り、次のように当時の「共生」が問題にされた位相を整理している。すなわち、「1988年当時の筆者らの調査では当初一般に予想された地域社会のパニック現象が見られず、むしろ地域社会が国境を越えた新移民者を柔らかに包み込み、事実としての住み合いが進捗して」いる（奥田 2004：77）。1994年の第二次池袋調査では、「実態の進捗度のテンポと幅が激しく」、「新到着のアジア系の人たちの社会層が定住外国人化して、彼らがすでに地

域社会の主要な部分を担っている」現状を背景に、「外国人居住者の社会的信用の漸増が、新到着の人たちの『住みやすさ』にもつながっている」と指摘している（奥田 2004：77）。

だが、こうした「共生」の位相は、移動者である外国人居住者の圧倒的な増加に応じて、その位相を変化させてくる。例えば、2000年代に入って池袋の中国系居住者の動向を調査した地理学者山下清海は次のように「共生」の位相変化について記述している。すなわち、池袋におけるアジア系（特に中国系住民）の圧倒的な増加が、越境移動の「磁場」をますます確固たるものにする一方で、留学生、出稼ぎ、起業目的の人々の来住が増し飲食業、IT関連起業等々が増し、「池袋新中華街構想」の軋轢も含め、「冷やかな共存」という「共生」の現実が顕在化してきた。山下によれば「冷やかな共存」とは、「あからさまに反目、対立しているわけではなく、おたがいの領域には足を踏み入れない暗黙の協定でもあるかのように、かぎられたエリアのなかで、日本人と新華僑が冷やかに隣り合わせに共存している」状態を指す（山下 2010：156）。

筆者は、こうした「共生」の位相変化は、現在さらに、新たな展開を見せていると感じている。筆者は、2011年度の「社会調査実習」の授業で学生とともに調査票調査を池袋において行ったが（広田研究室編 2011）、そ

の中でのある質問「外国籍住民が持っている日本人への印象」への回答のなかに次のような回答があったことに注目したい。「15、6年前よりは（日本人を）対等にみている。昔は日本人が偉そうにし、外国人は卑屈な感じがした」（70代、女性）（広田研究室編 2011）。すなわち、この「立場の逆転現象」は、「冷ややかな共存」というよりは、もっと直截に、「移民」「エスニシティ」の流入による推移地帯化の中で、「場所」の獲得をめぐる衝突段階が出現してきたことを示唆していると筆者は考える。

もちろん注意しておきたいのは、「場所」の獲得競争のポイントは、「日常実践」という潜在的に進行する「場所形成」の実践から、明らかに、顕在的な「領有化」を図る実践に移り出しており、その中で、既存の場所への意味付けと新来住の人々による新たな「場所」への意味付けが衝突、進行している、という現実である。無論この現実、旧住民と新来住の場所形成の衝突として現れている点が重要である。

本稿では、こうした場所の意味付けの様相やそれぞれの場所形成の衝突と融合の諸相をみていきたい。

## 2. 衝突する「場所形成」と「エスニック・コミュニティ」分析の枠組み

新宿に形成されている「エスニック・コミュニティ」を見るときに重要な視点として、以下の4点が大事である。

第1点目は、それが閉じた空間ではなく移動の「結び目」に生じていること、すなわち、「トランスナショナル・コミュニティ」としての側面に関する認識が重要である、という点である。「トランスナショナル・コミュニティ」とは、「移民がその出身地（origin）と定住地（settlement）の社会を連結する、複雑に縺りあわされた社会関係を育みそして維持する」ことによって、二つの移動の磁場を結んで、地理的、文化的、政治的な境界を跨いで形成する社会的な領域」とみなす発想であり、さらにこうした世界で生きる人々は、必然的に、いくつかの社会的制度がぶつかり合うことで形成される「曖昧」な領域で生きる「多声性」と「複合的」な「主体」としてのアイデンティティの「葛藤」と同時に「連帯」を求めようとする人々であるとしてとらえておくことが重要である（ギルロイ 1996=1998）。

実際、このような点的を絞って新宿を見ると、調査対象地域の新宿大久保、百人町を訪れるコリアンの人々—韓国の慶尚南道から来る人々が多いとも言われる—

は、新宿と韓国の慶尚南道を結んで「往還的」な移動をしながらビジネスや日常生活を行う施設—エスニック・レストラン、送金業者、学校、美容院、銀行、その他の移動の施設—を新宿大久保、百人町に作り出し、さらに当地に自らの同郷組織を作り出している。実際、大久保、百人町の「コリア・タウン」では韓国語や中国語だけで生活ができる環境も整えられており、その点では「トランスナショナル・コミュニティ」が出来ていると言ってもよい。

第2点目は、無論ここで言う「トランスナショナル・コミュニティ」とは、二つの地域を結ぶ国境を越えた「コミュニケーション空間」というだけではなく、現実の大久保、百人町という、“特定の地域に出現する実体としての社会的集合、コミュニティ”でもある<sup>2)</sup>。そしてそれは、国家的、地域的な様々な制度が行う政治的コントロールや圧力及びここから生み出される日常的な「言説」と時に衝突をしながら、自らの「領域」や「象徴的秩序」を作り出している。そしてこの圧力は日々に強まっている。例えば、昨今のヘイトスピーチなどはそのひとつの現れでもある<sup>3)</sup>。このような統合圧力を背景にもつ地域の側からの象徴的秩序の行使は、日常的には次のような象徴的な言説になって現れることがある。「郷に入っては郷に従え」「学校の教育水準が落ちたのは外国人が増えたからだ」「優秀な移民は国家のためになる」等々。少なくともこうした点に焦点を合わせて本稿では国人の流入や「場所」への意味付けをめぐる移動者たち及び日本人住民の「言説」がどのように飛び交っているかに焦点を合わせて、現状を再構成することが重要になる。

第3に、「トランスナショナル・コミュニティ」においては、独特の「コミュニティ編成原理」に注意をすることが必要になる。筆者が仮説的にイメージする「コミュニティの独特の編成原理」というのは、一つには、メンバーの非固定性、教会やモスクやその他移動の施設を中心にした、時に居住の近接性に基づかない「社会的集合」や「社会的凝集」という形が挙げられる<sup>4)</sup>。ここで「社会的集合」「社会的凝集」というのは、例えば、モスク等の施設を中心に多くの人々が集まるが、その集まりは常態化してはならず、たしかにハラルフード店等を中心に日常的な集合はあるが、時に潮が引くように目に見える社会的集合が現出していることである。注目すべきは、潮が引くように見えても確かにそこには「イスラム・スポット」と呼びうるような、人々の「社会的凝集」を感じる点である。このような設定をすると、本稿

では、移動者がそれぞれの「場所」に、その「領域意識」を象徴するどのような「言説」や「記号」を付与しているのかを探ってみることが重要になる。現実の人々の「言説」のなかに、人々の「場所」をめぐる態度や秩序感覚を読み取ることが必要になる。例えば、街を歩いて、ハンゲルや韓国を表す看板等の表象がどのようにおかれ、それに対して日本人住民がどのように対応しているか、あるいは、その表象がどのような「言説」として表明されているのか、双方の地域に関する関わりによつてどのような点で差異が生じ、あるいは、共通性を見出そうとしているのが本稿でのポイントである。

第4に、特に都市社会学的な関心としては、都市における「トランスナショナル・コミュニティ」の形成は、「推移空間化」とともに出現しているという点に注意しておきたい。ある地域に人や施設が「侵入」し、こうした実践によつて空間が変化していく過程は、都市社会学的には「推移」過程と呼ばれるが、この過程は、人々の実践過程からは、それぞれの「領域意識」の衝突の過程としてとらえることも可能である。つまり、移動する人々は、それぞれの生活のために（日本人居住者も同様であるが）それぞれの「場所」の獲得競争に入る。ここで言う「場所」とは、かならずしも「社会構造が投影された空間」（これを「統合化された地域」と呼んで区別してもよいと筆者は考える）というよりは、それぞれの行動目的のもと、意味付け利用（時に占有）する空間であり、特にそれが集団的に行われるときには、他の集団が意味付け、制度化されたあるいは統合化された「地域」概念との衝突となって現れることもある。それは時に「領域意識」の形成の衝突—地域の利用の仕方の対立となって現れることもあるし、時にそれは、「共生」を要請する圧力となって現れることもあるし、そうした意味での「共生」を良いこととする「言説」となって現れることもある。

筆者は、基本的にこの様相をとおして、「日常生活からの都市空間の形成や変容と人々の生き方」—「下からの都市空間」の形成—を見ることができないのではないかと、というのが本章での問題意識である<sup>5)</sup>。

第5に筆者は、こうした実践は、越境者のエスニック・エコノミーの実践そのものと結びついているが、同時に、エスニック・エコノミーの隆盛は、日本人住民の「遷移」を導くと同時に、新たな次元での「共生」の道を切り開くことにも通じていく可能性があるという点である。筆者はそれを新宿の「エスニック・コミュニティ」を見る時のポイントの一つとして指摘したい。

筆者は、新宿コリア・タウンに流入する移動者たちの、「場所」の意味付け及び獲得の諸実践、領域化の実践は、この「エスニック・エコノミー」の実践でもあり、これらの実践が、都市コミュニティの新たな編成原理と、当該受入地域社会の「受入」「包容力」の問題からもう一歩進んだ、新たな「場所形成（=place-making）」という問題領域への展開可能性を含んでいると考える。

以下、上記の各ポイントに焦点を合わせて、その「現実」を筆者の聞き取り調査のなかに探ってみたい。

### 3. 「推移空間」化する新宿大久保・百人町

#### 3.1 「推移空間」としての大久保、百人町の変容過程の概要

大久保、百人町地区は都市新宿の空間編成の中で「移動の磁場」になるまでに、いかなる変容を経験してきたのか。特に、都市新宿が西口地区を業務空間化し、隣接する地域—大久保、百人町を含む—を「推移空間」化してきた過程について簡単に見ておきたい<sup>6)</sup>。

新宿西口の副都心化は1991年（平成3年）新東京都庁舎の開庁とともに始まる。新宿区編『新宿区史（第2巻）』（1998年）によれば、西新宿地区には、1971年（昭和46年）の京王プラザホテルの開業から東京都庁開庁の1991年までの間に、約20棟の超高層ビルが建設されたというが、都庁開庁の前後からさらに、「再開発の動きが活発に」なった（新宿区編 1998：159）。例えば、西新宿6丁目では住友生命保険及び地元の地権者による再開発組合によって31階の超高層ビルと22階の住宅棟の建設、同年の暮れから住宅・都市整備公団による44階のオフィスビル建設の着工、東京ガスによる西新宿3丁目に53階の超高層ビルの建設、1992年（平成4年）には、上記西新宿6丁目にツインビルの建設が始まった（新宿区編 1998：159）。『同史』によれば、1995年（平成7年）には西新宿3丁目にNTT本社ビルの建設、JR東日本と小田急電鉄によるツインビルの建設と本社移転、さらに、南口の旧国鉄病院跡地に、新宿マイズタワーが開業し、「都心部から、あるいは山の手地区から新宿に本社が移ってくるようになった」と指摘されている（新宿区編 1998：160）。

こうした新宿西口地区へのオフィスビル、本社機能の移転は、同時に、隣接する居住機能の衰退、居住者の激減をもたらす。『同史』はその様子を次のように記述している。「地価が高騰すれば固定資産税も高くなる。固定資産税のアップは家賃にはねかえる。これに耐えきれなくなった区民は次々と新宿を逃げ出し、その後は貸事

務所に変貌する……このころの新宿区の人口減少は激しかった」(新宿区編 1998:160)。

実際、この人口減少化に符牒を合わせるようにして、外国人の流入が増加した。『同史』によれば、「昭和60年(1985年)末でも約1万人であった」外国人居住者は、「昭和63年(1988年)末には、16000人を突破し、平成3年(1991年)末には、18000人、そして平成5年(1993年)には19213人を数える」ようになった(新宿区編 1998:163)。

だが本稿では、この当時の外国人居住者が、必ずしも底辺層に入っていく「外国人労働者」だけで占められていたわけではないことに注目しておかなければならない。「出入国管理法及び難民認定法改正」の前後に池袋と新宿大久保、百人町において外国人居住者調査を実施した前出の奥田道大は、田嶋淳子との共著『新宿のアジア系外国人』(めこん、1998年)の最終章「新宿調査から学ぶこと—日本の地域社会のゆくえ—」のなかで、次のような興味深い事実について指摘している。「池袋調査では、老朽化した木賃アパートを集中的にノックしたが、新宿では木賃アパートは日本人居住者、特に一人暮らし高齢者が目立ち、外国人居住者の面接にかならずしも成功しなかった。むしろ、ほどほどの中級マンションで外国人居住者の面接に成功する中で、所得階層の高い外国人にサンプルが偏りすぎているのではと、調査者が悩むほどであった……また、不動産屋の話からしても、はっきりと『外国人お断り』をかかげた不動産屋は、むしろ例外である。外国人は入れ替えの回転率が高い、立ち退きにあって補償金等のトラブルが少ないということから、割増しの家賃、月15万円以上の物件は、生活慣習をめぐる多少のトラブルを覚悟してもむしろ外国人がお得意様であるというのが、不動産屋の実情である」と指摘している(奥田・田嶋 1998:296-297)。

初期シカゴ学派都市社会学者のE.W.バージェスは、都市の空間的発展のモデルを「同心円地帯図式」として呈示し、「推移空間」を、都心部に隣接してその拡大と発展による空間利用の変化に押されるように、新たな土地利用、空間利用の期待や思惑のなかで、現在の建造物の修復はおざなりにされ老朽化を深めた「退廃的」な地域となること、そして、当時のヨーロッパからの移民たちを中心に、こうした老朽化した地域に移動当初の居場所を求め、コミュニティを形成する人々が流入する地域として描いたが、これを新宿大久保地区の遷移過程に当てはめるなら、われわれは、新宿西口の「副都心化」としての空間的拡大に呼応しつつ、その周囲にあたる大久

保、百人町地区が「推移空間」化し、たしかに、老朽化した居住空間に、経済活動の場所を求めて、「移民」「エスニシティ」が侵入したということになる。

しかしながら、奥田、田嶋が言うように、新宿の推移空間化のなかで流入する「移民」「エスニシティ」は中級のマンションに住み、エスニック・ビジネスに従事する人々であることが推定される。バージェスも、同時にこの推移空間について「伝道団体やセトルメントや芸術家のコロニーや過激派のセンターなど—どれもみな、新しい、より良い世界のヴィジョンにとりつかれている—が証拠立てているように、再生の地域でもある」との側面にも注目しているが(Burgess 1925=2011:31-32)、前述の奥田・田嶋の指摘と重ね合わせると、新宿大久保、百人町は、新たな「場所形成(=place-making)」実践を追い求める外国人居住者が流入した「推移空間」であるといえるかもしれない。

### 3.2 「コリアタウン」「イスラムスポット」における「侵入」「遷移」過程

「侵入」と「遷移」という概念は、アメリカの都市社会学特にシカゴ学派都市社会学における「人間生態学」が使った言葉である。松本康によれば、都市の成長過程にともなって同心円構造そのものが拡大し、その結果、「場所に注目すれば、かつての住宅地域に含まれている地域は、やがて労働者住宅地帯となり、さらに格下げされて推移地帯になっていく。この近隣地区の変化を示すものが、新たな居住者の『侵入』と『遷移』である」ということになる(松本 2011:210)。人々の流入により、これまでの地域がコミュニティとしての様相を変え、別のコミュニティに置き替わっていく過程が遷移過程である。ちなみに矢崎武夫はこれを「代置過程」過程と訳している(矢崎 1963:74)。もちろん初期シカゴ学派のリーダーであるR.E.パークは、この過程全体をもっと高いレベルの社会の均衡過程—「競争-闘争-応化-同化」の過程—とみなしている。パークによれば、遷移とは、「初期の不安定な段階から相対的に永続的な段階または極限状況へと至る展開過程のなかで、生物コミュニティが通貨する秩序正しい変化の連続」である(Park 1936=1986:.)。ただし、パークは同じ論文で「より早い段階に達成された均衡は結局はくずされてしまう。このような場合、それまで平衡が保たれていた諸エネルギーが解放され、競争が激しくなり、相対的に見て急激な変動が新しい均衡の達成まで続く」(Park 1936=1986:169)。

現実に「人々や機能が置き替わる」過程として「遷移」という概念を定義し、とりわけ新宿大久保、百人町に形成されている「コリアタウン」「イスラムスポット」においてその過程を見るとどうなるか。長期にわたって同地域を調査研究している稲葉佳子によれば、1980年代までは、大久保、百人町の「コリア・タウン」は、台湾と韓国・朝鮮の店舗が中心で、経営は在日コリアンや台湾老華僑が中心であったという（稲葉 208:90）。しかし、80年代後半から90年代にかけて、「ニューカマーによるニューカマーのためのエスニック施設への転換が始まる」という。空間的には、職安通りに韓国・朝鮮系の施設が、そして、大久保通りには台湾系の施設が集まっていた（稲葉 208:92）業種は主にレストランや食材店が多かったという。だが、1990年代中ごろになると、「大久保のエスニックタウンは新たな展開を見せる」（稲葉 208:96）。特に大きな変化は、単に日本人を取り込むだけでなく、あるいは「日本人のイメージするエスニックタウンへの転換」ということではなく、旅行社、ホテル、旅館が数件登場し、母国との往復が活発化したことである。稲葉によると、後半になると、書籍・CD、中古リサイクル店、携帯電話・国際カード、不動産、エステ、同胞相手の生活情報誌等の業種が増える（稲葉 208:98）。空間的には、大久保西地区の韓国系施設に顕著に見られた。さらに同氏によれば、2000年代に入ると、細街路にあった店が職安通りに加えて大久保通りという表通りに進出し、特に2002年のワールドカップ以降、資金力のある経営者がこれまでの経営家族主義的な店舗に替わっていく。稲葉によれば、空間的には、「細街路の内『一番街』と『大久保の竹下通り』が幹線通りに先行する形で立地が進（み）、……幹線道路のなかでは職安通りの施設立地が……90年代中ごろから勢いを増し……90年代末には大久保通り北側の百人町2丁目ある『文化通り』と『ムスリム通り』に集中的に施設が増した」という（稲葉 208:112）。

稲葉の時期区分をエスニック・エコノミーと「遷移過程」という観点から整理すれば、第一段階として1980年代までは、台湾の老華僑という「ミドルマン・マイノリティ」や在日韓国・朝鮮の「自営業主」たちが、細街路中心にレストラン等の商売を中心にした小規模のエスニック・エンクレーブ・エコノミーを展開していたが、第二段階として1990年代にかけて、いわば、エスニック・エコノミー及びエスニック・エンクレーブ・エコノミーの経済活動を支える、ニューカマーによるニューカマー相手の、さらに往還移動を支える業種と施設が、職安通

りを中心に展開し、第三段階としての1990年代半ばから後半にかけて、往還移動経済を支える施設が一層充実し、第四段階としての2000年代になると、資金力のある新たなエスニック・エコノミーを担う経営者の出現とともに、エスニック・エコノミー、エスニック・エンクレーブ・エコノミーの拠点としての街「オオクボ」が全面展開した、ということになる。

ちなみに、新宿区のタウン誌である『新宿区新聞』の記事から、特に2005年から2012年までの期間をとり、上記の記述を補足しておきたい。筆者が目にしたのは、各年の1月1日付の特集記事が主であり、この記事を持って一般化できるとは無論、考えていないが、2005年から2007年までの間の記事で特に目につくのが、1. 職安通りにほとんど空き店舗が無くなり、大久保通りに抜ける細街路（通称イケメン通り＝大久保の竹下通りを中心に）への「北上組」と歌舞伎町2丁目に向かう「南下組」に分かれたこと（例えば2006年1月1日付、同年9月25日付、2007年1月1日付等）、2. 資金力のある経営者の活動が目立ち出したこと（2005年1月1日付、2007年1月1日付）、3. 「在日韓国人連合会」や「慶尚南道民会」等の経済的同胞組織の存在が記事の中に頻繁に出だした（2005年1月1日付）。例えば1に関して、2006年9月25日付では、大久保、百人町の細街路では「一階部分を違法増改築した飲食店」について触れ、依然として通称「大久保の竹下通り」といわれる細街路の人気の高さが維持され、それに応じて問題も山積し、町会、商店会のパトロールが始まったことの記事が見られる。ただその中でも、2007年1月1日付の新聞では、「E建物株式会社」のH氏の発言として、最近の職安通りはほとんど動きがなく、逆に大久保通りが動いていること、「在日韓国人連合会」関係者の発言として「コリアタウンは今再編中」という言葉を掲載し、出店が頭打ち状態になっていることが指摘されている。

エスニック・エコノミーの象徴でもある「資金力のある経営者の進出」という点では、2007年1月1日付の新聞には、日本国内最大級の韓国スーパー「K マート（コリアタウン・マーケット）」の進出に関する記事が目立つ。その他にも、2005年11日付の新聞では、コリアプラザ、韓国広場、仁寺洞、プラザホテルその他を所有している「株式会社I」による不動産取得の活発化の記事が見られるのは、依然として、資本所有の寡占化が進んでいることを示唆している。

2007年の後半ぐらいからは、コリアタウンの不況の記事が目につく（2007年8月25日付、2008年1月1日付、

2008年10月5日付、2010年1月1日付等)。最も注目されるのは、上記の「Kマーケット」が2006年12月の開店以来一年もたたずに閉業したことである。同紙には、同地の精神的シンボルでもある「C教会」の話として、「コリアタウンは教会も多いが、『礼拝に参加する在日韓国人は減っている』」とする記事が掲載されている(2008年10月5日付)。空間的には「北上組」はそろそろ終わりを告げたことを示す記事も目につく。例えば、2008年10月5日付の新聞には「職安通りと大久保通りの間は住宅街の要素もあり、もうこれ以上の出店はむずかしい」という不動産業者の言葉が紹介されている。ちなみに、アメリカにおけるエスニック・エコノミーを研究しているI.ライト(Ivan Light)とS.ゴールド(Steven J. Gold)は、エスニック・エコノミーとエスニック・エンクレーブ・エコノミーを概念上区別して、エスニック・エンクレーブ・エコノミーの担い手は、移民の自営業者を中心とする人々で、それがエスニック・エンクレーブ・エコノミーと呼ばれる所以は、自分が所属するエスニック・コミュニティもしくはエスニック・エンクレーブの人的資源やネットワークなどの社会的資源を利用し、同じエスニシティを顧客として成り立つ経済というところにポイントがある(Light and Gold 2000: 11-13)。

無論コリアタウンにおけるエスニック・ビジネスの現実を、上記のように純粋な形で類型化することはできないが、しかし、この類型化は、少なくとも、上記の展開を見る限りでは役に立つ。ここで重要なのは、ライトやゴールドそしてポルテスらの、エスニック・エコノミーやエスニック・エンクレーブ・エコノミーへの注目は、その実践の高まりが、当該受入国経済及び社会の活力に貢献するということである。筆者もこの立場にたつて論を進める。

では、このような展開過程のなかで、場所をめぐる「統合」への圧力との葛藤はどのように展開し、日常の言説の世界の中にどのような姿をみせているのか。筆者の聞き取り調査結果のなかに読み取ってみたい。

#### 4. 「場所形成」過程における衝突と交渉 —「結節点」におけるニック施設での聞き取り調査結果より—

本節では、①移動者がそれぞれの「場所」に、その「領域意識」を象徴するどのような「言説」や「記号」を付与しているのか、「トランスナショナル・コミュニティ」としての側面を連想させるエスニック施設—教会、モスク、レストラン、ブティックその他の「サード

プレイス」的施設—toに焦点を合わせて、「場所」へのそれぞれの意味付けやその衝突や交渉の過程について、どのような言説が飛びかうのかを見ていきたい。

#### 4.1 移動者の「場所」の意味付けと「トランスナショナル・コミュニティ」の「現実」

##### ①大久保細街路通称イケメン通りのブティックで

まず、通称「イケメン通り」において実施したR氏(50代 ブティック経営 女性)の、主に大久保「イケメン通り」をどのような「場所」と考えているか、エスニック・エンクレーブ・エコノミーの自営業としてどのような商売をしているか、に関する「言説」の一部を紹介したい。R氏は、細街路の通称「イケメン通り」にブティックを出店している韓国ソウル出身のオーナーであり、日本人の夫と子供がおり、韓国でも家族がブティックを経営している。父親は医者。R氏本人は韓国で大学を卒業している。なお、以下の聞き取り調査結果は、2012年5月26日に筆者が一人で聞き取りをした結果と、学生とともに聞き取りをした結果をまとめた『2012年度社会調査実習調査報告書 トランスナショナル・コミュニティとしてみた新宿大久保・百人町』(芳文社)からの抜粋である。

細街路、通称「イケメン通り」への移動についてR氏は次のように説明している。

「こちらに店を出して2年です。韓国でも弟が同じ店を出しています。ソウルに全部あります。私はブティックだけもう30年以上やったから、今日本はほんと景気が悪いんですよ。だから私、赤坂でブティックをやっていた時は1着20万ぐらいの売り上げでした。でも日本の景気が悪くなって、赤坂には、韓国クラブの女の人が多い、イタリアブランドを中心だったけど、やっぱりクラブも景気が悪くてホステスも高い洋服は買わないようになってしまった。それで新宿にきたんです」。

「ここね、こっちに引っ越ししてきて、韓国で洋服屋さんもやってるし、それであのお店探したんですよ。そのときは家賃も10万円だし、当時の赤坂の家賃60万円ぐらいだったから、それに比べるとほんと安く入ったんですよ」。

「でもそのときはもうここ私が入る前には1日売上ゼロだったこともあった。私に店を売ってくれた人の場

合、1日の売上が1万円以上ということは一回もないって。それで私はこの店を安く買って、それから、どんどん日本人のお客さんが来出して、やっぱり洋服が綺麗だからね、安くて良い物がやっぱり良いからね、お客さんみんな知ってるんですよ。それで店が狭くなったから、駐車場4軒分に店をつくって。これは私の店の前に駐車場があるんですよ。ここのビルのね。駐車場を全部借りて、そこで自分が洋服を売ったり、化粧品売ったり、それでずいぶん広くなった」。

しかし、現在は活況を呈している細街路「イケメン通り」を中心とした、エスニック・コミュニティも「遷移」の過程にあり、R氏は次のように「コリアタウン」の将来を考えている。

「もうダメですよここは（イケメン通り）、もう終わりじゃないかなって考えてる。もう今は、大久保が広がったんですよ、どんどんどんどん人が来て。前はここ「イケメン通り」だけで日本人のお客さんがいっぱいだったんだけど、今はまた次へと移っている。新大久保からどんどんどんどん広がっているから、お客さんを奪い合うことになっちゃう。だからもう難しくなった。そして今入った人みんな家賃が高くなってしまったんです。この1年2年あいだに、家賃がいまは60万円持ってないと店を出すことができない」。

「もう赤坂と同じの家賃になってる。それが現実。だから家賃払って、人件費払えば、1円も残らない。だからもう大久保、私の考えは、もう私はもしタダでくれても、私は、やりません。それは体だけ疲れるし、もう、ね？人件費で全部出して物はなんにもならないです。苦労だけする。疲れるだけ。うちも今は私が仕入れたら全部ひとりでやって、ただ事務員ひとりでやるんですよ。違う店だったら、このぐらいの大きさだったらいたいアルバイト4人いないと出来ないのよ。でも私は残るために、自分が朝6時に起きて、全部、仕入物を入れて、全部チェックして、監視して、保安カメラまできちんと入れて、自分がきちんとして、だから、人ひとりだけアルバイト。だから私はもし一日30万円とか20万円売り上げしたって、計算をはっきりしないと赤字になる」。

「コリアタウン」という場所を彼女はどう意味付けているか。本人は現在、大久保というよりは「新宿」に住

んでいる。彼女のなかでは、新宿と大久保とは異なる場所である。

「新宿。前は、大久保だったんだけど、もう地震があってから、いいマンションに引っ越ししたんです。今新宿歌舞伎町のすごく健康なマンションに引っ越しした。」

「日本人の人はみんな引っ越して、中国人が来る。韓国人がうるさい。私は、大久保に住まない。麻布とか赤坂とか新宿には住んでたけど、大久保には住まない。全部中国人。中国の次がタイ人」。

最後に、R氏の「コリアタウン」及び母国との商売上のネットワークについてはどうか。

「一番初めに店出そうとした時、兄弟や仕事上の相談をしたことはない。弟はソウルでブティックをしているけど、連絡してということはない。もう自分だけでやっている。私は若いとき韓国でお店やって。経験が大事。旦那さんに相談とかはしない。両親にお金を送るといってもない。私のスタイルは弟でも家族でも、自分のところで働いてアルバイトしてお金あげるとはOKだけど」。

「日本に来たとき、韓国人の団体には入らなかった。韓国人わがままだから。本当わがまま。私が日本人好きなのは、日本人集まるから。集まることは中国人がNo1です。こわいくらい集まる。次が日本人ですね。韓国人はわがまま。自分が先。自分が疲れると、それで終わりですね」。

「このあたりのお店同士で、組合とかお付き合いは特に私は、ないんです。一切ないんです。入れ替わりが早いから。本当早いんです。私はここにいても、前の本当のオーナーが誰か分からない。隣の有名なショップだけど、その人も誰か分からない。私、2年半ここにずっといますけど分からないですね」。

韓国人としての日本での生き方、アイデンティティはどうか。

「今、娘は、六本木ヒルズの中にある、美容関係の大学に通っている。1年になりました。今年18歳です。美容専門大学です。私の娘は、「冷たい」みたいな感じで、自由で。娘が来て「彼氏ができました」と言うすとす

るよね。高校のとき一回彼氏と付き合っただけで別れてしまって、家でずっとウーって泣いている。それで今回彼氏を連れてきて「ママ、今日彼氏ウチに泊まるかも。」と言うよね？「いいよ」と言ったの。韓国の社会ではそういうことはない。でも、私のスタイルは、今が幸せいっぱい感じればいから、自分が好きなようにしなさい。小さい頃に東京韓国学校とか、そういうところには入れたいと思ったけど、どうして新宿に来たかは、赤坂にいたとき子どもが韓国の高校行くとしたからです。でも、韓国に連れて行ったら、子どもが日本人だからできないんです。日本国籍だし、だから新宿来て。日本人だから」。

②大久保1丁目の細街路通称「イケメン通り」でのアルバイトの韓国人学生

上記のR氏の場合は、日本での居住が長く、また家族が日本での生活を中心にしている事例であり、むしろ同じエスニシティとの繋がりや薄さが特徴であったが、新宿「コリアタウン」を、単なる仕事の「場所」としてとらえている人々が多いことは確かである。次の聞き取り調査は、現在韓国の大学院に通っている20代の女子学生で、通称「イケメン通り」で化粧品関係のショップ店員として働く人の、「場所」への関わりかたが端的に示されている。大久保コリアタウンに関する若い人の「場所」への関わりが浮き彫りになっている。聞き取りは、2012年8月に行われた。

「名前はIです。年齢は23歳、出身地は韓国です。今、東新宿です。現在、大学院在籍で韓国の京畿大学です。武本には、新宿・大久保には2011年10月に来ました」。

「場所」としての新宿大久保について彼女は次のようにいう。

「いたくありません。アルバイトのための場所です」。

将来については、次のように述べる。

「今、韓国で大学に通っていて、どうなるかわからない。韓国に家があるので、将来は韓国に住みます。昔から住んでいた家なので」。

日本人住民が彼らをどう思っていると想像しているか。

「呼び込みや音楽の音でうるさいだろうと思います」

彼らは結局、大久保、百人町をどのような「場所」と考えているのか。

「良い点は中心地なので住みやすいし、便利。悪い点は韓国人が多すぎて、あまり日本に来た気がしないときがある。新宿大久保、百人町の魅力については、新大久保と近いので、外国に来たような感覚になる場所。でも、ここはバイトした記憶しかない」。

③文化通り通称「イスラム・スポット」と「モスク」  
越境の地に自らの領域化を図ろうとする人々もいる。  
次の事例は、通称「イスラム・スポット」でのイスラム系の人々の「場所」への意味付けの一例である。

「イスラムスポット」とは、百人町「文化通り」の一角に「形成」されている、イスラム系住民の「場所」である。「文化通り」それ自体は、日本人住民にとっては、古くからの住宅地であり、過去には小説家が住み、茶会が行われ、グローブ座等の劇場がある地域である。だが、ここに「イスラム・スポット」と呼ばれる場所が形成されだして以来、「文化通り」をめぐる「場所の意味付け」「領域意識」の衝突の過程が生じている。次の言葉は、「文化通り」の古びたビルの一室に作られているモスクに通い（後述のN）氏が主催）、この周辺のハラルフードで買い物をし、モスクを主催するメンバーとの交流が深い、あるイスラム信者R.D氏（30代、インドネシア国籍 男性）の言葉である。

「このモスクは14年かな。はじめからこのビルに作られた。部屋を借りて、みんなが集まって、お祈りしたりとかね、まあ、みんなそんなにお金持っていないから買えないから。このモスクに集まる人の国籍としては、バングラディッシュ、インド、ガーナ、ミャンマー、インドネシア、ターキーかな。パキスタン、シリア、あとはスリランカ。金曜日に200人ぐらい集まる。金曜日が一番多い。200人ぐらい色々な国の人が集まる。普段は、みんな仕事あるから。でも20人30人ぐらいは来る。金曜日は、一番お祈りだから、その時休みしてみんなお祈りする」。

「私は、ここに住んでいないが、近いところに住んでる。でも、遠いところ埼玉とか色んなところからモスクに来る。ただ、僕はこっち住んでます。新大久保。歩いて5分」。



彼らはこの一角の場所に、特別な思いを寄せ、個人的にというよりは集団的な「想起の空間」を作り出している。R.D氏の次の語りは、そのことを我々に教えてくれる。

「18時に集まってここでご飯を食べる。いつもNさんがとても優しい。彼の考えるビジネスにお金持っている人がたくさん来る。なぜかって神様が手伝ってる。日本では、学生でも金がいっぱいある。日本でも、分け合えば幸せになれる。今毎月40人、勝手にここに来る。そしてお金を払ってる。維持費。ガス・電気・水……。だから皆うちきて集まってお祈りして、彼も本当に喜んでる。店も売り上げほんとうにアップしている。彼のところが一番」。

「心から何かやるとどうにかなる。信じてないと。例えば今日も60人くらいくる。みんなでご飯。毎月3万4万くらいかかる。ボク給料26万。みんなで1万ずつ果物買ったりとか、ジュース買ったりとか、それでみんな一緒にやれば、みんな楽しい」。

「(お祈りある時に) そのタイミングで来るとあなた驚きますよ。みんなケンカしないで真面目にお祈りして、食べて、帰る。さっきみた男も、彼の名前はM。彼も料理が好き。そして皆食べて帰る。そしたら食べた洗い物のお皿がこんなにある。それを、私とあと1人が洗う。なぜかという、神様、アッラーは僕たちを助けてくれる。僕たちご飯を食べたら嬉しいでしょ、そしたら綺麗に洗う。今日も例えば2時間前くらいからご飯の準備して、1時間前くらいに果物とかの準備をした。日本にもイスラム教は増えた。代々木とか、こことかにも。お祈りもちゃんとする人はする。僕の会社の社長は仏教だけど、お祈りは、社長が怒らないようにとか、売り上げのためにアッラーに。自分だけの幸せをお祈りするのはイスラム教ではダメ。アッラーは全部はあげない。できるだけ与える」。

新宿「文化通り」のイスラムスポットでモスクを主催するN氏は、「文化通り」から少し入った通りのいわゆるイスラム・スポットのなかで、数件のハラルフードの店を経営している。群馬にも同様の店を所有しており、家族も同県内にいる。通常は群馬と新宿百人町を回って商売をする。彼は同時に、このイスラム・スポットの古いビルの3階部分を借りて、モスクを始めた。その管理

も彼の責任で行っている。このイスラム・スポットの、「リーダー」の一人ではある。次の聞き取りは2012年8月4日に行われたが、筆者は、10年前にも同氏に聞き取り調査をしている。今回のインタビューはモスクの廊下で学生とともに実施した。

N氏は、モスクについて、次のように語る。

「このモスクには、500人くらい入る。場所がないときは200人。このモスクには、女性専用の部屋がある。日本人は女性のイスラム教が圧倒的に多い。ここだけでも30~40人いる。昔から、パキスタン・インド・バングラディッシュ人と結婚して、今その人たちの子どもがたくさんいる。同じ信者で女性と男性間で差別・違いはない。駐車場でお祈りする人もいれば、顔を巻かないで歩いている人もいる。ちゃんときれいにやっている人もいる」。

「女性は、例えばカースト制などの影響は、日本ではない。インド国内ではあるが、イスラム教にはない。イスラム教には貧乏でも1番最初に来た人が始める。遅かったら王様でも後ろに並ぶ。イスラム教の女の人は、例えば土日在家帰って、ここでお祈りしてすぐに帰る。女性がここでお祈りするとは限らない。女性は家の中でお祈りするのが1番多い」。

「リーダー」としてのN氏については次のように言う。

「私は、信仰上の世話人かもしれないが、世俗的なことのリーダーではない。モスクを管理しているだけ。しかし、話合いたいならいつでも話をする用意はある」。

N氏にとっての文化通りという「場所」はどのようなところであろうか。

「私は群馬県とここを往復している。ここは商売の場所だけど、モスクを作ったし、お祈りをするところでもある。だから自分にとっては特別な「場所」だ」。

#### ④「イスラム・スポット」の日系送金業

「文化通り」の「イスラム・スポット」には、「トランスナショナル・コミュニティ」としての移動の施設がある。例えばその一つに教会と送金業がある。この教会は日系ブラジル人向けの教会であるが、この文化通りにもある。また、「送金業」の会社もある。その送金業の一つに、KYODAIがある。もともとこの会社は、在日の日系ペルー人のための送金業であったが、市場をさらに

アジア系の外国人居住者に増やしつつある。

同企業の取締役K氏（50代、日本人、男性）に、なぜ「イスラム・スポット」にオフィスをもったのかについて次のように言う。

「15～16年前です。まだあそこにしかなかったころです。KYOUDAI という会社名で始めたころでした。KYOUDAI 自身は1980年に川崎で始まりまして、その後すぐに蒲田の南側に移り、それから数年後に蒲田の北側に移って、その後2002年に五反田のペルー領事館と同じビルに移りました。2002年に「地下銀行」という指摘を受け、実際に時差の関係でお金の先払いをしていたということで訴えられましたが、その後、無罪と言うことで、他の「地下銀行」とは違って、海外に追放されるということもなく、会社と個人が普通の罰金をうけるという形での起訴ということで終わりました。その後いろいろなみなさまのご理解を頂いて、私どもの仕事が、こちらのペルーの皆さんの生活に役立っているものであるという認識を頂いて、銀行のみなさんの理解もいただいて2000年の7月にまた再開させていただきました」。

「その後、銀行の当局のみなさんもわれわれがペルーに特化しているということ認識しながら、私どもが為替の処理をさせていただいて、みなさんの一任を受けて書類の作成をするという形での仕事2010年まで続けさせていただきました。2009年に資金決済法が改正され、日本でもいわゆる「送金業務」というものが、あるいは為替事業を行うということが銀行以外でも可能になって、私どもとしても、それであればそういう形をとらせていただくよう登録をさせていただきました。おかげさまで4番目にとれました。ということで2010年6月11日から「資金移動業」としての仕事を始めさせていただきました。それまでは理解していただいていたとしても、銀行がやるべき仕事の一部を私どもでやらせていただいているというところがありまして、ほかの国への送金というものに関しては、わたしどもはしていなかったのですが、登録をとらせていただいたところから、世界中のどこへでも送金ができるということで、こちらのほうにアジアの方がたくさんいらっしゃるということで、事務所をだして、皆さんのお役に立てる状況を作ればということが2010年の11月とかにスタートさせていただいた大体の経緯です」。

東京に限らず、KYOUDAI のオフィスは関東圏を中心

に置かれている。例えば、東京の五反田、新宿、神奈川県の大和市、群馬県伊勢崎市、太田市、真岡市等々である。真岡市と伊勢崎市、太田市は日系人が多いためであるが、日系人の減少とともに、アジア系外国人をターゲットにし出したというのが真相のようだ。新宿大久保、百人町は、韓国のコリアタウンがあり、パキスタン人とかインド人がおり、中国系も小滝橋通りを中心に多いので、「イスラム・スポット」に置かれた。

#### 4.2 「移民」「エスニシティ」と衝突する日本人住民の「場所形成」認識

①文化通り商店会長の「場所」への意味付けをめぐって

文化通りに20数年居住し、現在、商店会の会長を務めているG氏（70代 男性）の「統合」に関する「言説」の世界に入りたい。このインタビュー調査は、2012年7月25日に、「文化通り」の裏の通りにあるGさんの店で行われた。「相手が見えない」状況と、背後にイスラム住民と日本人住民との「場所の意味付け」もしくは「領域意識」の衝突についてG氏は次のように語っている。

「接点がないんですね。我々が仮に商店会に入ってくださいとか道路の使い方が悪いから、これは区の規則に反してるといっても彼らは受け付けない。町会とは何も彼らは接点はない。我々はいろいろとイスラム系の事件が起きた時に行政に申し込んだんですけども、別に現在事件が起きているわけでもないから。気にすることじゃないと警察は言う。確かにあそこに来ている人は悪くはない人だと思いますけど、夜遅く出かけるのも道路に座ってしゃべっていたりするんですね、そういう人の中に悪い人が混じってないか我々も心配してるんですけども、接点があって話し合いがあって日本人の地域に溶け込むのに積極的になってくれれば我々も安心していらしていただけるんですね。そういう一抹の心配もあります。あの人たちはいい話であれば日本語が通じるんですけども。通じないふりする」。

モスクを媒介にした「社会的集合」の形成と「領域意識」については次の意見があった。

「こちらでは文化通りを中心にイスラム系の人が集まってきていて、モスクやハラフードとか「外国語学校」、集散するのではなく一時的に集まってきています

が実際には、そこまでいってない。ただ、八百屋さんがあったりとか文化通りのイメージとしてはだんだん崩れているというか。もともと文化通りとは由緒ある通りというか古いお店が集まった通りで、小説家の下村胡人さんも昔住んでいた。昔は100坪以上の家ばかりで格式があった」。

「そうですね、我々の代だけですけれどね。ただ接点がないので何とも言えないですね習慣も違いますね。どう接点をもつかということですね、私なんかは心配している方ですけどね、大震災もありますしね、そういう場合にそういう人たちにどう対処するか、区のための備蓄はあるらしいですけど、地域の組織に入っていない人をどう扱えばいいか、人道的にとしか行政は言っていない」。

「入らないです。ほとんど入らない。それが我々の一番の悩みといいますか新宿区も一時そういう人たちの共生といいますか、行政が推進したんですけどもそれは我々が思っている共生とは違ってます、彼らを受け入れようという共生であって日本人の社会に溶け込んでほしいという意味合いの政策ではないんですね。だから我々が行政に対しても彼らは我々町内会なり商店会なりに参加するように共に発展するような形になればいいと思うですね。ところが行政の方が彼らが入りたくなるような組織にしなさいという。そのように姿勢が変わらないため我々は行政に提言してきているんですけどね。彼らは日本社会というか外灯についても我々日本人が課したり払っているわけだけど彼らはそれを当たり前と考えているんですね、そういう点で商店会に入って日本人の相手と一緒に貢献しましょうということであれば我々ももっと仲良くできるんだと思うんですけど。共有しながらお金はださないその辺が課題で区からの町の活性化という相談が来ますけど、行政が橋渡しをしてくれないといつまでたっても平行線だね」。

エスニック・エンクレーブ・エコノミーの展開は地域活性化にどのような影響を与えているか。

「地域全体が盛り上がりがないと活性化にはならないのじゃないかと私は思う。ですけども例えばあそこのイスラム系の人が見えても、せいぜい八百屋か自分の国のお店に入って行ってしまう。この奥にもグローブ座っていう劇場があるんですけど、結構人通りが多いんですよ

ね、文化通りの奥に、我々は劇場なので期待していたんですけど彼らは劇場に来るのが目的で終わったらすぐ帰っちゃう。だからうちの商店街で食事や買い物をする人はほとんどいない。だから難しい地域なんですよ」。

「(イスラムスポットができて活性化したと言説について) 結局ジャーナリストと我々考えは乖離があるので、彼らが言うように我々は感じていない。まあモスクができた当時は我々が知らなかったというかね、原因とすればモスクができてからイスラム系の人たちが寄ってくるようになって、それが結局それに関する人たちのための買い物の店が増えてきたっていう感じだね、我々住民としては韓国と中国もそうですけども地域に溶け込んでくれない。それが一番困ったことなんですけれどね。結局、外灯にしてもいわゆる公共の設備も彼らは我々の組織に入ってくれないんですよ」。

「マレーシアなどのレストランがいっぱい集まっていますが、こちら一帯の商店会「文化通り親和会」には入っていない。あそこの周りの日本のお店も繁盛していれば活性化になるんですけど。文化通りも今、流星座の隣にグローブ座ができて流星堂なんかも前は、日本の経営者で韓国のじゃなくてね、その時は入会してもらって会費払ってくれたんだけど、韓国人の店になったら会費は払ってくれないと、そういうことが難しい」。

「今の文化通り親和会に入っているかということになると、最近の人はいってないからどうでしょうね。結局、日本人の人であそこに住んでる人が会員になっている人で60%くらいいるかな。だんだん減ってきているといわれるが、お店だったところがビルになったりマンションになったりして商店は減ってるんですけどね。外国の人対象にしたお店は増えてますけど、商店の数は減ってますからね、マンションとかね、私も文化通りに住んでいないんですけどね、次の人がみつかるまでね。親和会の会員数は 会員は80人くらいですよ、商店だけではなくマンションにお住まいの方もね。形としては町会と思われてもあれですけど、基本としては商店会ですよ。一般の方も防犯と維持管理は当初からの目的なので協力してもらおう。建て変えの時とかね、無理もあるのでマンションのオーナーとかには入っていただいて。マンションでオーナーじゃなくて一般の方も団体という形で地域支えていく」。

以上のような衝突を潜り抜け、こうした状況変化を好条件に転換しようとする人々も見られる。

大久保通と細街路「イケメン通り」との交差する場所にビルを持ち、I町会の副会長をしているU氏（70代 日本人 男性）の言説の世界を取り挙げてみたい。U氏は自身の所有するビルにコリアンはじめアジア系居住者に部屋を貸している。この聞き取りは、2012年7月28日に筆者によって、U氏の自宅で昼過ぎから実施された。聞き取り調査からは、日本人定住者の、大久保という「場所」への関わりや、日本人居住者の視線をとおしてみた、大久保コリアタウンで働く外国人と日本人居住者の場所認識を読み取ることができる。

まずは、これまでの「共生」概念が通用しなくなっている現実についてのU氏の意見を聞いておきたい。その語りの中には「領域意識」の衝突が明らかである。

「とにかく、I町会のみについてお話しするならば、非常に住みにくいということ。どういうことかという、外国人が多いということかな。一言でいうと。大手を振っているのは韓国人ですよ。何をやるんだってね、協力が無い」。

「雲をつかむような話だから。在日の人もいるし、店を持った人もいる。様々ですから。ニューカマーという、そういう方もいるし。手さぐりで、お互いに。それほど突っ込んだあれもないしね、ちょこちょこ顔合うつてこともありませんから。ただ忙しいということもあるんでしょけども」。

「新宿区の考えと我々住民の考えとでは隔たりはあります。要するに、区としては共生・共存を、国際化やグローバル化のなかでもっと進めるといふ。我々も彼らが来て生活も潤っていますから、一概に「国に帰れ」などということは、これはいかなものか。やっぱり、多少とは言いながらも、生活その他で潤っている。でも、区長に、あまりに（現実を）知らなすぎるから、「私のマンションに空き部屋があるからそこで1週間くらい生活してみませんか?」と言いましたよ。その隔たりをわかってもらいたいのと、住みにくさを我々は言っているわけですから。例えばゴミの問題。人の家の玄関に自分のゴミを、あるいは粗大ゴミを平気で捨てにくるということが。まあ最近はかなり減りましたがありますよ。朝行くとタンスからベッドから冷蔵庫から山ほど来て、私もう何十年もやってきて、それで自分でダンプカーを頼

んでね、金かけてね、もう散々やってきましたよ」。

コリアタウン形成によって大久保地域が活性化したのか、それによって町の利用のされかた、およびそれぞれにとっての「場所」の意味付けの衝突はどのようにあるのか。細街路「イケメン通り」の「活性化」の問題に事寄せながらU氏は次のようにいう。

「まったくゼロとはいわないけど、ほとんど影響はね、街を汚すくらいでね。ちょっと聞いたと思うんだけど、人が来ればトイレの設備も必要だということもあって、それは国際化の、知らないふりをしているんだろうけど区役所の方もね。トイレを商店街に作ることもこれは大変なことなんですよ。だからね、そういう設備もないのにどうぞいらっしやいじゃね、いかなものかということですよ」。

「実際、商売の方に言わせると、さっきも言った通りゼロとは言わないけどほとんどね、だって来る人は日本人ですから。例えば、富山県からとかね遠くからバスで、あるいは、大阪からも来ますから、よく見ますけどね。ただ何も大久保で日本のもの買わなくたっていくらでも他で買えるわけですから。目当てはなんだって言ったら韓国の化粧品あるいは食べ物、韓国料理はもちろんだけど。だから、一般のお店にはあまり影響はない。場合によっては迷惑をする。とにかく店の前で立ち止まっておしゃべりしたりね、入りにくくしたり、場合によっては周りを汚したりする。もちろんアパートには多少老朽化はある。犯罪ということについては何もここだけに限らずやはりひったくりは多いし、もちろん万引きも全てある」。

「推移空間」化の現状と、双方の「領域意識」の衝突に関しては、U氏の「言説」の世界では次のように語られる。

「先ほど申し上げた通り、もう住民は困惑しているわけですよ。そうそう。深夜にうるさい。買い物に行くのも大変で歩けない状態。（かなり古くから住んでいる方は）ほとんどそうです。日本中どこに行ってもそうですけど、2代目・3代目っていうのが、どっかいつちゃうとか、とにかくもうそこに住んで一生そこに骨を埋めるといふのは非常に難しい時代で、そういう意味では待ってましたというばかりに逆に外国の方が住み着くと

ということになって、どこに行っても今家が建つと外国人の表札が出てくる。ちょっと見ない苗字があれば外国の方が住んでいるというのがこの辺でも多いですからね」。

「もう高齢者になった、あるいはね高齢者もいなくなった。じゃあそのあとをどうするのかと言うと結果的には売りに出す。で、それを買うのは日本人じゃなくて外国人。ほとんど流れがそうになっている。もうこの辺は、ほとんどね外国の方に乗っ取られると、そういう言葉を使う。もういくら金出しても買い取りをするというのが現状です。だから、うちが内装・外装やったってという話を聞くと、それは日本人じゃなくて外国人だったというのがこれはもうこの辺じゃ何も珍しくない」。

「イケメン通りのちょっと入ったところにアパートで「M荘」というところがあるんだけど、その人がね、自分とこの駐車場の入口の横にクレーン車を入れて、入口の畳10畳くらいのでっかい看板を立てられたとってこの間カリカリ怒ってね、警察に電話したんだそうです。それで警察が来たそうです。それで、これは民事だからまた困っちゃってね、途方に暮れてました。自分の領地の隣が丁度ね、出っ張った家があって、そこでお店をやる外国人がね、通りから見えないということで10畳くらいの看板を、それも夜中に立てた。なんの断りもなしに。それでもう癪に障ったからってね、今度は自分のところに塀を立てるんだって言ってました。そういうふうには話戻っちゃうんだけど、礼儀もへったくれもあったもんじゃない」。

「本当に全部が「コリアタウン」になっちゃうんじゃないかってね。感じしますよ。とにかく住みにくい。だんだんだんだん日本人が少なくなっていく。後継者もいなくなる。そこでもう、どっか静かなところに行きたいとか。そういう答えが出る。外国人居住はやはり、日本の東京、日本の新宿・東京の新宿か。生活するあるいはお店を出す。これが生きがいですから。生きがいというか誇りだね。外国人に言わせれば新宿っていうところは。だから、連中は財産を売ってまで、あるいは命を張ってお金を借りて、まあ日本人も外国行けばそうなるんだろうけども、一人の人が、もちろん信用も必要なんだけど、お店を出せばみなさんが協力してね、金銭の援助をするというそういうような状況にあるみたいですけども、そういう意味では、仲間の店が増えていく、日本人

は減っていく。そういう感じが今、急です」。

「この大久保という地域の悩みがあって、歌舞伎町から南北にね、そういう路地があって、ここは商売に適していないし、住みにくいしね。ここはなんの生活の基盤というか、防災にしても、生活の安定化にしても何のとりえもない場所なの今はね、目まぐるしく変わってね。コリアタウンなどと昔なかったものができているわけですが、要するに歌舞伎町のベッドタウンなわけですけども、たまたまイケメン通りができちゃったんですけども」。

#### 4.3 「エスニシティ」の「場所形成」に対応する日本人住民の乗り越えと「共生」の試みについて

上記のような「エスニシティ」あるいは新来住の人々の「場所形成」過程に積極的に乗り越えようとする可能性が地域の中に見つからないわけではない。その一つの方向性は、個々の日本人住民の日常実践、状況乗り越えの展開可能性であり、もう一つは、移動者、越境者自身のエスニック・エコノミー、エスニック・エンクレーブ・エコノミーの展開が、新たな次元で、地域社会の資源や承認を必要としている事実である。

日常実践と言うことで言えば、例えば、前出のU氏の場合も、ただ手をこまねいているわけではない。むしろU氏はそれを巧みに利用するひとりでもある。

##### ① 通称イケメン通りの前出の町内会副会長の場合

「前は、この辺は歌舞伎町のベッドタウンで、そういう水商売の人が多くてだんだんいなくなったんです。この間、日本人を新大久保行きで助けた韓国の若い青年を聞いたことがありますか？それは大きいニュースになりましたね。それで、今、奨学金を与えるアジア奨学会というのが設立されて、私は今そこの理事をやっております。で、それを機にですね、自分のビルに学生を入居者として入れるようになりました。もう集団でしょうかね、そういう意味では一般よりも安くしています。このビルは共同住宅となっております、14世帯ぐらいかな、ほとんど学生。地域がら家賃は高いけど、少しでも便利さで。1番肝心なのがアルバイトです。アルバイトをここはできるってのが1番いい条件ですよ、学生さんにとっては。それで多少の家賃は高くても住む。家賃はまあ、まあせいぜい6万以内だな。まあ6万としても2人で住んでる方もいますよ。2人で住めば、1人4万。まあそんなところですよ。今は、外国人がいて成り立って

ると私は思いますよ。その前は、歌舞伎町のベッドタウンであったから、水商売の人。または彼らの家族が住んでいた。しかし今、歌舞伎町はしらけきってますからね、そうなると、アパートが空いちやうわけです。そうすると、今はコリアンタウンの人がここを利用する。持ちつ持たれつとか悪いことばっかでもないし、いいこともあると私は思ってますけどね」。

さらに、移動者の側からの協力の申し込みの話も紹介しておこう。同じU氏への聞き取り調査では次のような話も出ている。

「(在日韓国人会については)ここ2、3年ですね(2010年ぐらいから)、2、3年前から「韓人会」の代表の方が、「(韓国人が)いろいろ日本人に迷惑をかけているので、話し合いをしたい」ということを言ってきました。来月8月にも、その話し合いがあります。向こうから呼びかけられまして「何でもおっしゃってください。ゴミ問題、騒音問題、何でも言っていただいて、そういうことがあったら私もそういうことがないように、韓国の連中にちゃんと法律にのっとってやるように指導をしますから」ということを言ってきました。ただ、彼らの中にも、12月31日に税金を納めないで韓国帰って、4月1日に帰ってくるっていう人も珍しくないんですよ。そのお金を国へ送金するというね、そういうこともあると思います。ただまあ彼らも、長くいるというか、どうしてもみなさんといっ雰囲気生活したいということからですね。気分よく飲食店に日本の人も来てほしいという意味からね、良くして行こうという姿勢はね、見えています。」

## ②「移民／エスニシティ」の地域と融合を模索する「場所形成」

エスニック・エコノミー、エスニック・エンクレーブ・エコノミーの進展が逆に、地域との共生を条件とし出した点については、下記の、「韓国農食品連合会」会長のS氏の発言に注目することが必要である。

「韓国農食品連合会」とは、韓国から食品を輸入する会社が20社ほど集まって形成している連合会であり、「コリア・タウン」をここまで大きくした立役者の一人である「K広場」のK氏を初代の会長として、現在の会長のS氏で5代目になる。今から7年前に結成された。いわば、韓国版「ミドルマン・マイノリティ」の連合体であるが、「コリア・タウン」の、エスニック・コ

ミュニティとしての人的資源や施設を利用しつつ、日本人相手の商売をする経済体である。

S氏の話の端々には、「コリア・タウン」の展開と日本人顧客との「共生」の必要性に関する意識が垣間見える。

例えば、S氏は、次のように言う。

「新大久保という所はですね、自然に商売の町になってきているんですね、まず一番は韓国学校が近くにある、住んでる人が多い上に、裏の世界でも飲み屋がいっぱいあって。今はほとんど少なくなったんですがそこで働いている人の受け皿として食堂が作られたり、いろいろな商売の仕方が自然にここでできあがった。起業ってよりは生計を立てる必要のあるひとが、一生懸命こういう町を作ったんですね。そのうち、韓流ブームがありそのイメージで日本人がここに集まってきた。……留学生の街というイメージが一番大きかったんじゃないかと思いますね。そこで企業をやっている人たちがよそから入ってきて、少しお金をかけて店を作り、後は生計の人たちも競争が激しい中で生き延びるためにいろいろやってきた。日本のマスコミも、ここにいる人たちの活気というか、なんか戦争のあのような活気に注目した。マスコミもそうだしこっちにいる人もそれに合わせて、いろんなことがあてはまって韓流が大きくなった」。

「農食品連合会は10何年前に作ってしまして社団法人になったのは七年前でちょうど今、韓国広場の社長が私の前の会長なんですね、四代目私は五代目になってるんですが、30社くらいの輸入会社が集まって韓国の食品を輸入する会社なんですね、輸入して卸もして、商売もやっているところが多いんですね、で、ちょうど新大久保っていう町には多くて500店舗くらいあるんですよ。新大久保にある食堂はあわせて、正確には376つあっていいましたっけ、物販含めて500店舗以上あります。この386店舗は、いわゆる家庭料理で、焼き肉含め、われわれにとっては、大きな市場ですよ、そこの品物を使ってくれる。それが集中されているのが新大久保であり、なおかつドラマからkポップに変わり、kポップはとにかくライブに行ってみる楽しさもあって、ちょうど東京ドームとか集まってやりますね。そうすると五万人くらいが集まって、その五万人が熱気を持ったまま行く場所ここなんです。近いですしね、やる前にここで地方からもきますしね、けっこう鞆をもって歩く人たちも多いんですが、そういう人たちがここでご飯を食べたり、買い物を

したり、雰囲気味わうところとしてはちょうどいい場所です。土日というのは多かったですね」。

「この商品の輸入会社が30社、これらは韓国全国からですね。加工食品が多いので工場はあちこちありますね。ですから加工食品を輸入する会社が多いので、コチュジャン、みそ、のり、キムチ、あらゆる食べ物が1000種類以上あるとおもいますね。ここの一階もスーパーなので量は多いと思います」。

「昔はK広場しかなかったところが今は四か所ぐらい作られて、そういう競争もありますし、お客さんも増えた部分もありますが、日本のスーパー—さんも去年の八月まではいっぱい扱っていたのですが、八月の政治の絡みの問題でそこから九月にかけてイベントがほとんどなくなってしまい、活動が止まっている状態でいわばスーパーが売りたいということがありますが右翼とか苦情が入ってくるのを恐れてイベントは中止、ハンゲルが書いてあるものおいてるとクレームが来ると恐れ、ほとんどそういうのが動かない状態になりましたね。そこにマスコミも同じく、例えばkポップやドラマをテレビでやる場合、続けてやった場合は苦情が続いて1,000件以上なると中止になってしまうので、それがあったのでみんな中止にしてできなかった。マスコミでは韓国kポップ、ドラマを扱うことはどんどんしなくなって、この1年間はほとんど触れずに、やるようになっていきます」。

「とくにデモの部分はまた違ってデモは日比谷公園や違う所でやっていた、わかりやすい韓国のイメージがあることで毎週土日に粘り強くやっております、ちょうど6月30日までは結構やりました。ちょうど、日曜日の二時の一番忙しい時間にやって、ここに集まってきた人たちが区役所や当番や色々やったとしても、なかなかそれが受け入れられない。普通に韓国でもそういうデモがあったりするんですが、粘り強くあきらめずに一年ぐらい続いたっていうのが、私としても不思議だったんです」。

「私は製造業をやっていますが私一人だと思えますね。製造業をやるといことはなかなか、時間もすごくかかりますし、私も15年かかっています。投資もしなきゃいけない。だいたい連合会の方で商売をする人々は何が多いかというと、まず輸入したものを卸しをする方が多かったですね。野菜や魚、いろいろ食に関して集まっ

ている。なんで食品の仕事をやり始めたかについて、普通に日本の日本人がやっている仕事をやろうとすると、競争もそうですし、良くわからないことが多い、わかりやすい部分では食べ物であり韓国の品物であり持つてくるとしても説明ができるんですよ。市場があったから開拓するってのも大きいのですが、まず向こうのこと知って持つてくるっていうのはわかりやすいという弾みもある」。

「ニューヨークマンハッタンにコリアウェイというコリアタウンがありますが、そこがこっちとは全然違うのは、ターゲットが違うんですよ。こちらのターゲットは日本人です。ここに韓国人が買い物に来ることはまず99パーセントないですね。ほとんどお客さんは99パーセント日本人です。食品はその店で使う業務用ってことではやっぱり韓国人が多いんですが、個人としては日本人が多いですね。新大久保に来る人たちの90パーセントは日本人です。アメリカの場合は韓国人が百万人も移住しているんで市場は、韓国人がターゲットなんです。西洋人はコチュジャンとか食べませんね、海苔も食べませんね。ですからターゲットが違う」。

「このコリアタウンの方が地元の日本人との繋がりはもしかするとコリアウェイよりも深いかもしれない」。

「日本人の商店あるいは商店組合のやり方とこちらのビジネスのやり方と、経済のルールなどもちょっと違うと思いますけど。ここは違わないと思うんですが、大きな違いとすれば集まったりする組織はここの中で作れるでしょうね。ここで仕事をやっている人たち化粧品をやっている人たち、そういう動きはあるんですけど、特に点の組織になっているので全部違うんですね、競争ももっと激しいし、日本のよくあるそちらがやるならうちはやらないよっていうのは韓国はないですね。ものすごい競争が激しい中でやっているのも同じものみんなやっちゃいますね。潰しあいもありますね、それは韓国のやり方だと思いますし、教育がそうでしたし談合してどうにかするより競争、そういうのをまとめて何かするのは無理があると思います。それでレベルアップするところと、そこにお金を持っている企業が入って競争するところもいろいろやってるし、それからどんどん作っていく店も増えていくだろうし、生き残るのは至難の業。私は日本しかわかりませんが、このなかでは当然競争もありますし、よくいますよね、しかし国によって違うかは良くわからないのですが、私はそういう競争は必要だと思

いますし、いずれかは乗り越えていかなきゃいけない仕事の中での競争ではないですかね」。

## 5. 結論—「トランスナショナル・コミュニティ」と「場所形成」への展望

### 5.1 聞き取り調査の整理

本調査は、新宿大久保、百人町を対象に、特に、大久保通り、通称「大久保の竹下通り（イケメン通り）」及び、百人町の「文化通り」と通称「イスラム・スポット」に焦点を合わせながら、「トランスナショナル・コミュニティ」化のなかでの「推移空間」の形成とみなし、韓国人移動者、ムスリム移動者の「場所」認識と、受入側日本人住民リーダーたちの、「場所形成」及び「統合」意識に関する、聞き取り調査結果を掲載した。

本調査では、「トランスナショナル・コミュニティ」化する「エスニック・コミュニティ」分析の方法として、「場所形成」という側面に注目し、特に「移動中の結節点としての場所」「推移空間化における場所形成」「日常世界の言説における場所の意味付け」という三つのポイントにおいて現状の一端を描こうとした。特に、フィールド経験からは、それぞれ、「場所」と「地域」に関しては、「場所」の「領域意識」と象徴的秩序を表す「言説」がどのように人々によって語られているか、移動中の結節点として場所という点では、対象とする二つの「通り」と、そこにあるショップやモスクやハラールフード店等の、いわば「ノード」「結節点」における場所形成意識の展開について描いた。

「推移空間」化のなかでの「場所」をめぐる問題としては、①移動者がそれぞれの「場所」に、その「領有意識」を象徴するどのような「言説」や「記号」を付与しているのか、②外国人の流入や「場所」への意味付けをめぐる日本人住民の「秩序」に関わる言説がどのように飛び交っているか、③それぞれの「領域意識」と「統合」の衝突はどのような言説として語られているか、④エスニック・エコノミーの実践が、当該受入地域社会の「受入」「包容力」というレベルからどのように進んだ、新たな「共生」への可能性を見ることができるか、という点が注目された。

本インタビュー調査及び資料から得られた結果を図式的に整理すれば、下記ようになる。第1に、「コリアタウン」及び「イスラム・スポット」に集散する人々には、自らの目的に基づく「場所」への意味付けが強烈に行われているが、ただしそれは、「地域」の秩序構造とは衝突と融合を繰り返しながら進んでいること、第2

に、こうした意味での「場所」をめぐる「領域意識」や「象徴的秩序」の形成は決して個人的なものではなく、集団的、集合的に実践され、「場所」をめぐる意識や実践や象徴的秩序同士の衝突はますます激しさを増し、既成の地域社会秩序への「統合」と「異質共存」との懸隔はますます大きくなっていること、しかしながら第3に、こうした衝突を繰り返しながら、「コリアン・タウン」のエスニック・エコノミー、エスニック・エンクレーブ・エコノミーが進展するにつれて、新たな次元での「共存」を模索する動きが、「移動者」「エスニシティ」の側からも生まれてきていること、が注目される。

### 5.2 「推移空間」における「統合」と「共生」のアポリアとその乗り越えの文脈について

この事例の最後に、「トランスナショナル・コミュニティ」という問題設定のなかで「場所」と「地域」概念の現在の定義に関する問題と、「共生」が改めて問題になる位相変化に改めて一言述べておきたい。

都市新宿を、本社機能が集まる西口地区を中心業務地区とみなし、同心円状に拡大する構図を借りに描くことが可能だとすると、まさにこうした空間全体は、グローバルな力対情緒が涵養される場としての「ローカル」という図式のなかに放り込むことも可能である。だが、そのような図式とは別に、「推移空間」しての新宿大久保、百人町の内部における同地域への人や施設の「侵入」と「遷移」の現実に目を向けると、例えば、通称「イケメン通り」という、一本の「細街路」のなかで、あるいは「文化通り」及び「イスラム・スポット」という距離にしても十数メートル程のほんの短い「ストリート」のなかで、異なる意味を与えられた「場所」と「領域意識」がしのぎを削る様相が、「トランスナショナル・コミュニティ」化の現実として、インタビュー調査結果から伝わってくる。

「トランスナショナル・コミュニティ」における「場所」とは何か。「統合」と「共生」とは何か。

筆者のフィールドワークからするなら、R.J.ジョンストン (R.D.Johnston) が指摘した、A.パーシー (A.Passi) の考え方、すなわち、「地域」を「社会全体の空間構造の一部」とみなし、「場所」を「個人的に意味付けられた空間」として定義するという考え方が、ある一定のリアリティを持つと改めて感じた (Johnston 1991=2002: 76-79)。ただし、実際、現場でインタビューをしてみれば、M.P.スミスが批判するように (Smith 2001)、上記のように定義される「場所」は、決して情緒涵養の



個人的な「場」という範疇に収まるものではなく、「場所」の「領域認識」や「象徴的秩序」が、個人を出発点にしなが、ひとたびそれが集団的に認識され出すと、あるいは「コリアタウン」や本調査対象地の「通り」が、「コリア・タウン」や「イスラム・スポット」という「場所」の「象徴的秩序」が集団的に演出され出すと、それは、既存の「社会の空間構造の一部」として行政的に推し進められてきた「領域意識」と衝突を起し、組み込みや排除の過程が始まる。

個人の意味付けを出発点的にして何らかの象徴的な意味付けをされた「場所」も、「社会の空間構造」の一部としての既存の制度化された「領域」への「統合」、及び、「領域意識」と常に接触し、交渉し、乗り越えを繰り返す社会的実践を現出させる。梶田孝道は、2005年の論文の中で、1970年代、80年代とマイノリティのマジョリティに対する積極的な権利要求の主体であった「エスニシティ」は、その後、「非正規移民の排除」や外国人犯罪や治安の維持といったネガティブな側面を象徴する存在に変化した、というが、だが、上記のインタビュー結果からは、同時に、その衝突の激しさを増しながらも、どちらの側からも「共生」を模索する動きも速さを増している。これは、単に個人のイメージの中に創りだされる「場所のイメージ」の衝突と交渉ではなく、象徴的な秩序を創り出す集団的な実践同士の衝突と交渉であり、それらが生み出す「場所形成」の過程が問題となっており、社会の空間構造の制度化に、ある時は取り込まれつつも、あるときはその修正を迫るそうした契機を持つものであるということが出来る。エスニック・コミュニティの充実が、ある意味で、こうした「場所」の意味付けと新たな次元での「共生」を引き出す可能性もみられる。これが、新宿「コリア・タウン」でのここ数年の筆者の現場での聞き取り調査経験から得られた結論である。そして、こうした動きの中で現れているのが、こうした「場所」意識を生み出す基盤としての「トランスナショナル・コミュニティ」の編成原理としての「結節点を介した社会的集合」「社会的凝集」の形である。

\*本稿は、平成24年専修大学研究助成の結果報告の一部である。記して謝意を表したい。

\*本稿に掲載しているインタビュー結果については、広田研究室編、2012、『2011年度 社会調査実習報告書 トランスナショナルな越境移動者と経験された都市的世界』芳文社、広田研究室編、2013、『2012年度社会調査実習報告書 トランスナショナル・コミュニティとして

みた新宿大久保・百人町』芳文社（ともに非売品）にまとめられている。無論実習授業であるのでインタビュー調査の多くには、実習履修学生や本調査実習に興味を持った学生が入れ替わり立ち替わり同席しているが、本稿に掲載されているインタビュー調査は筆者自身が行っていることをお断りしておく。ただし、インタビュー調査書き起こし作業に関しては学生たちが分担作業で行い、最終的に広田が加筆修正をした。特に本稿で主に使用した2012年度調査に同行してくれ特に努力してくれた学生たちに感謝して名前を記しておきたい。唐風清、谷優希、殿川晃輔、田嶋凌、佐藤良宣、酒井佳樹、森泉鈴子、木村安希、佐藤絵里菜、橋本直幸、矢島千亜樹の学生諸氏に感謝する。

そして最後に本調査でお世話になった方々に謝意をこめてお名前を挙げておきたい。新宿区多文化共生プラザ所長：大熊賢司氏、新大久保商店街振興組合理事長：諏訪信雄氏、同副理事長：内藤雅也氏、在日韓国人連合会事務局長：劉宣鐘氏、在日韓国農食品連合会会長：申尚濶氏、高麗博物館専務理事：田崎敏孝氏及びスタッフの皆様、文化通り商店会会長：源田氏、イスラム・スポットのハラール・フード店経営者オーナーでモスク管理者：ナセル・アブドラ氏とそのご友人一同様、通称イケメン通りで筆者のインタビューに快く応じてくださった皆様に、心から感謝したい。

## 注

- 1) 移動の磁場としての池袋や新宿に関する社会学的実態報告としては、奥田道大・田嶋淳子編、1991、『池袋のアジア系外国人』めこん、同、1993、『新宿のアジア系外国人』めこん、を始めとする一連の研究があり、都市社会学における外国人居住者研究、都市エスニシティ研究の原点となっている
- 2) ここでの考え方は、広田康生、2013、「トランスナショナル・コミュニティ・パースペクティブの諸仮説」『専修人間科学論集 社会学篇』Vol.3、No.2（3月刊行予定）に紹介した。
- 3) 筆者のフィールドワークの過程で、高麗博物館のあるスタッフの方が収集していた、ヘイトスピーチ関連の新聞記事をお借りしたことがある。そのなかのある新聞の記事によれば、「在日韓国・朝鮮人の排斥を掲げるグループが（2013年）6月30日、コリアンタウンがある東京・新大久保でデモ行進を行った。しかし、反対する団体が行く手を阻み、以前のように新大久保を闊歩することはできなかった。この日行われたデモについて、韓国のメディアも大きな関心を示した。韓国のSBS放送は、デモ行進が始まる前から反対派の人々が集まり、帰れコールを響かせていたと、記事『“帰れ” 嫌韓デモ、現場で

光った日本の良心』(6月30日付)で紹介した。ただし同新聞によれば、「デモに反対する勢力はデモ隊の勢いを圧倒するほどだったという。ヘイトスピーチ(憎悪発言)を繰り返すデモ隊と反対する団体、警察が入り乱れる状態になり、辺りは騒然となった。デモ隊は新大久保の周辺を少しずつ進んだが、反対派の勢いに押されて中心街に入ることはできなかった」、という。また、2013年9月24日の【ハンギョレ】には、「新宿通り 1500人余 “差別止めよう” さらに大きくなった叫び 極右の跋扈に危機感高まり、参加者増える “涙で勝ち取ったこと、無にしてはならない”」との反ヘイトスピーチの運動が始まったことが掲載されている。さらに、2013年9月23日の【朝鮮日報】には「嫌韓デモやめよう 東京で1000人が大行進」の記事が掲載されている。また、これに先立つ2013年7月17日の「民団新聞」には、「反韓デモに行政指導?…東京・新宿で「延期」、コース一部変更も」という見出しで、「行動する保守運動」を名乗るグループが7日に予定していた東京・新宿区での「東京韓国学校補助金撤廃デモ」が、「延期」になった旨が掲載されている。そしてこの中止に対する行政指導に関しては、6月30日のデモは初めてコースが一部変更された。この日のデモの主催者はブログに、「新宿警察署の警備担当者との話し合いの上で、コースも変更し、混乱を回避することでも合意した」と書き込んだ。公安委員会を經由して、現場の警視庁警備課・新宿署が行政指導した結果、との発言が掲載されている。さらに【統一日報】の2013年11月7日の記事には、「京都朝鮮学校事件判決と人種差別撤廃条約 急がれる新たな法制定」という見出しで、在日韓国人法曹フォーラム Q&A の記事が掲載され、京都地裁が10月7日「在日特権を許さない市民の会」(在特会)が2009年12月に京都朝鮮第一初級学校前で行った街宣活動について、在特会側に約1220万円損害賠償の支払いと、学校から半径200メートル以内での街宣活動禁止を命じ、ヘイトスピーチなどに悩まされている人々にとって、京都地裁が在特会の街宣に「差別的発言」が含まれると認定した上で賠償責任を科したのは肯定的に受け止められる、との記事が掲載された。このように、このヘイトスピーチとそれへの反対の動向を、排外主義と同運動への戦いの例とするならこうした運動はますます激化している、といえる。

- 4) 「必ずしも居住の近接性にもとづかない社会的集合や社会的凝集」という言葉については、例えば、マフェゾリ、M,1997、『小集団の時代—大衆社会における個人主義の衰退』(古田幸男訳)法政大学出版局に示唆を受けて表現したもの。しかし、このような社会的集合や社会的凝集性については、初期シカゴ学派都市社会学のなかの、N.アンダーソンが描いた「ホーボー」「ホボヘミア」の世界の研究のように、都市社会学においては、既に追究されている (Anderson, N, 1923, *The Hobo: The Sociology of the Homelessmen*, The University of Chicago Press=広田康生訳、1999-2000、『ホーボー』(上・下)

ハーベスト社)。

- 5) 「下からの都市空間」という表現は、奥田道大の表現である (奥田道大、2009、『人々にとって「都市的なるもの」とは』ハーベスト社、を参照)。
- 6) 「推移空間」「侵入」「遷移」の用語については、Burgess, E, 1984, "The Growth of the City" in Park, R and Burgess, E (eds.) *The City*. Univ. of Chicago Press=松本康訳1911、「都市の発展」松本康編、2011、『都市社会学セレクション1 近代アーバンイズム』日本評論社、矢崎武夫、1963、『日本都市の社会理論』学陽書房等を参照。

## 参考文献

- Anderson, N, 1923, *The Hobo: The Sociology of the Homelessmen*, The University of Chicago Press (=広田康生訳、1999-2000、『ホーボー』(上・下)ハーベスト社)
- Burgess, E, 1984, "The Growth of the City" in Park, R and Burgess, E (eds.) *The City*. Univ. of Chicago Press (=松本康訳1911、「都市の発展」松本康編、2011、『都市社会学セレクション1 近代アーバンイズム』日本評論社)
- Gilroy, P, 1996, *British Cultural Studies and the Pitfalls of Identity in Black British Cultural Studies* (=英国のカルチュラル・スタディーズの落とし穴)『現代思想 総特集 ステュアート・ホール』青土社)
- 樋口直人・稲葉奈々子・丹野清人・福田友子・岡井宏文、2007、『国境を超える—対日ムスリム移民の社会学—』青弓社
- 広田康生、2012、「日本人のグラスルーツ・トランスナショナルリズムと『場所』への都市社会学的接近」『専修人間科学論集 社会学篇』Vol.2, No.2
- 広田康生、2013、「トランスナショナル・コミュニティ・パースペクティブの諸仮説」『専修人間科学論集 社会学篇』Vol.3, No.2
- 稲葉佳子、2008、『オオクボ 都市の力—多文化空間のダイナミズム—』学芸出版
- 梶田孝道、2005、「マジョリティの側から見たエスニシティ問題—立場の逆転—」『NIRA 政策研究』Vol.18, No.5
- マフェゾリ、M, 1997、『小集団の時代—大衆社会における個人主義の衰退』(古田幸男訳)法政大学出版局
- 奥田道大、2004、『都市コミュニティの磁場』東大出版会
- 奥田道大、2009、『人びとにとって『都市的なるもの』とは』ハーベスト社
- 奥田道大・田嶋淳子編著、1991、『池袋のアジア系外国人』めこん
- 奥田道大・田嶋淳子編著、1993、『新宿のアジア系外国人』めこん
- Burgess, E. W, 1984, "The Growth of the City: An Introduction to a Research Project" in Robert E. Park and Ernest W. Burgess (eds.) *The City: Suggestions for Investigation of Human Behavior in the Urban Environment*. Univ. of Chicago Press. (初出は1925 (=松本康訳、2011、「都市の成長

ー研究プロジェクト序説」松本康編『都市社会学セレクション1 近代アーバニズム』日本評論社)。

松本康、2011、「解題」松本康編『都市社会学セレクション1 近代アーバニズム』日本評論社

Park, R. E, 1936, "Human Ecology" A.J.S, Vol.42-1=町村敬志訳、1986、「人間生態学」『実験室としての都市ーパーク

社会学論文選』(町村敬志・好井裕昭編訳) お茶の水書房  
新宿区新聞社『新宿区新聞』2005年～2012年

新宿区編、1998、『新宿区史』新宿区総務部総務課

山下清美、2010、『池袋チャイナタウン』羊泉社

矢崎武夫、1963、『日本都市の社会理論』学陽書房